室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

CHANGE

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2020-06-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010195

「CHANGE」

脚本決定稿

室蘭工業大学

注：実際の映像中のセリフと一部変わっている場面があります。

プロローグ

研究室。
ビーカー、フラスコなどが雑然としている。
何かの実験が行われている。
実験室に入ってくる拓也。
男の両手には色の付いた液体が入ったビーカー。
危なっかしく実験中の学生達の後ろを通る。
その中のひとりとぶつかる。

（コマ落とし）
ビーカーの中の液体が拓也にかかる。
白衣が色に染まる。
床に割れて散らばるビーカー。

テロップ「このビデオは皆さんが社会人として主体性を持って
生きて行く為に必要な常識的な基礎力を再確認し自己改善を
促す事を目的として作成されたものである。
登場人物はあなた自身かもしれない。」

強烈な BGM がカットイン。

オープニング（プロローグ）

オープニング
短いカットが続く。
忙しく動く衝の表情。
現代社会に生きるサラリーマン達。
授業風景の切り取り。
帽子の学生。
飲み物を飲む。
ゴミを捨てる。
見ても拾わない。
授業中の雑談。
勝手に席を立つ。
携帯をいじる。
一人食堂で昼食。
寝ている。
マンガを見ている。
イヤホンをかけ音楽を聴いている。
コンピューター教室
整然としたものづくり室
マッハの部屋
ロボットのパイプ室

BGM カットアウト

無音
テロップ「全編オムニバスの 11 話構成」

エピソード１　「老人と歩く」（道案内）

住宅街にあるバス停。
バス停標識にゆっくりと滑り込むバスのタイヤ。
バスのドアが開き、ゆっくりと杖をついた老人が
降りてくる。
後ろにいる拓也がイライラと待つ。
（拓也のモノローグ）
　　「遅いなア～。この爺さん。ちゃっちゃとおりろよ。」
老人の後ろからやっと降りた拓也。
老人を追い越し歩く。
老人「あの～。すみません。」
呼び止められる拓也が振り返る。
老人「ここに行きたいんですが。」
手には手書きの地図。
仕方なく老人の元へ。
拓也「（地図を見ながら）…水車町 27 の 4。えっと…。これがその信号だから…。
　　あっちかな…。たぶん。」

（拓也のモノローグ）
　　「まいったな～。この地図よくわからないや。」
老人「ありがとうございます。とりあえず、行ってみます。」

あっちかな…。たぶん。」
老人は少し困った表情で拓也を見る。

何回も頭を下げる老人。
先を急ぐ拓也。
信号を左に曲がる。
拓也の「！！」の顔。

（拓也のモノローグ）
「この信号右じゃなかった。ヤバイ。間違った。
どうしよう…。まっ、いいか。わからなかったら誰かに
聞くだろうし。」

気になって振り返ると滑って転ぶ老人が目に入る。
思わず走り出す拓也。
拓也「大丈夫。」
老人「ありがとう、ありがとう。滑っただけだから。」

かかえて立ち上がらせる拓也。
拓也「ホントに大丈夫？」
老人「ご親切にありがとうね。」
ためらいながら謝る拓也。
拓也「…あの。間違ってました。すみません。」
老人「ん？」
拓也「さっきの地図もう一度見せて下さい。」
地図を渡す老人。
拓也「（地図を見て）やっぱ反対だ。」
ポケットからケータイを出し、時間を確認する。

拓也「まだ大丈夫…。俺、案内します。」
老人「いやいや、悪いからいいよ。一人で行けるから。」

拓也「この辺り分かりづらいから」

老人「…そうかい。じゃお言葉に甘えて。」
二人ゆっくり歩き始める。
自然に老人が拓也のコートをつかむ。
拓也の顔には優しさがにじみ
老人の顔には安心感に満ちている。

一軒の建物の前で。
老人「あ～。ここだ、ここだ。いや～、本当に助かった。
ありがとう。」
深々と頭を下げる。

拓也「いや～。（照れる）。じや、帰りも気をつけて。」
老人「あつ。ちょっと待って」
拓也「！？」
老人はポケットからアメを一個出す

老人「食べて」
拓也「いいすよ」
老人「気持ちだから」
拓也「…じゃ。いただきます」
老人「ありがとう、本当に助かった。」
頭を下げ続ける老人。

歩きながらケータイをかける拓也。
拓也「あ、俺。もうちょっとで着くから。待ってて」
振り返ると老人が手を振る。拓也も手を振る。
拓也「えっ。別に何もないけど。…いつものと同じだって、
　　何もかわっていって…。」
フレームアウト
NA「思いやりは相手を、それ以上にハッピーにすることができるのですね。」

エピソード２　「次の実験は何をすれば」（実験失敗）

実験室に入ってくる教授。
　教授に気づき。
拓也「おはようございます。」
室田「ああ、おはよう。」

室田「そうそう。先週やった実験はどうなった。」
拓也「残念ですが、失敗でした。」
室田「…そうか。失敗か…。」
拓也「次は何をすればいいんですかね。」
室田「次って…、どういう意味だ。」
拓也「次の実験は何をすればいいのか分からなくて。」

室田「あのね…。今回の実験の失敗の原因はわかっているのか。」
拓也「いえ。」
室田「まずはその分析だろう。」
拓也「理論的には間違っていないはずなんですが…。
とにかく原因は不明で、失敗が事実です。
その理由が知りたいんです。教えて下さい。」

室田「人に聞いてしまったら研究にならないだろう。」

拓也「でも、原因が分からずに実験をしていても
また失敗してしまうでしょ。」
室田「何回失敗してもいいじゃないか。実験はそう言うものだ。
失敗を恐れていては何も始まらない。忘れちゃならないのは
実験の目的だ。ちゃんと自分で考えなさい。」

教授は実験室を出て行く。
閉じるドアの音。
拓也は頭を抱えて座り込む。

NA「もう一度初心に帰って目的を再確認し、
　　取り組んではどうですか。大切なのは失敗をおそれない
　　ことと目的意識を持つ事。

さ、頑張って！」

拓也はデーター表を見始める。
決意した顔の真剣な表情。

NA「そうそう。一歩、一歩前に進みましょう。」

エピソード３　「カーズサワムラ登場」（Good Morning）

小さな教室に学生たちがいる。

廊下を歩く教授「カーズ」
突然横から飛び出て来た拓也が「カーズ」に
ぶつかる。倒れる「カーズ」。

拓也「どーも（小声で）。」
ペコリと頭を下げ急いで走り去る拓也。

教室に入るカーズ。
中の学生が一斉にカーズを見る。
学生達「！？」
カーズの鼻につめられたティッシュ。
ホホのすり傷。
カーズ「（ニッコリ笑って）ハーイ。オハヨウゴザイマス。」
学生「おはようございます。（小声）」
カーズ「元気ヨク。オハヨーゴザイマス。」
学生「おはようございます。」
カーズ「グッド。エ.今日カラ、皆サント
有意義ナ時間ヲ過ゴシタイト思ッテイマス。
私ノ名前ハ…。」
黒板に書く。
『カーズ・サワムラ』
カーズ「ボストン出身デ、日本二ハ…。
カーズの「？」の顔。
学生の一人が頭を下げている。
カーズ「ドゥシマシタ？具合悪イ？」
頭を上げずに首を振る学生。
カーズ「ジャア、頭ヲ上ゲテ下サイ。」
ゆつくりと上げる学生。
カーズ「オゥッ。君ハサッキノ…。」
拓也「…。」
困った顔の拓也が目を伏せる。

翌日。
廊下を歩く拓也。
後ろから声をかけるカーズ。
カーズ「オハヨ.ゴザイマス。」
声を聞いて固まる拓也は

小さく頷き逃げる様に足早に去る。
カーズ「…。（あきれた様に首を振る）」

拓也の自宅。
無言でカレーライスを食べる拓也。
父と母がいつもと違う拓也に気づく。

母「大学で何かあったの？」
拓也「いや。」
母「悩み事でもあるの。」
拓也「別に。」
父「どうした。父さん相談に乗るぞ。」
拓也「だから、たいした事ないんだって。」
母「やっぱり、何かあるんじゃない。」

お茶をすする父。
向かいに座っている拓也。
父「そりやあ、お前が悪いな。」
拓也「分かつてるよ。そんな事。でも…。」
父「…でも何だ。」
拓也「朝の挨拶もしようと思ってるし謝ろうとも
思ってるんだけどさ、今いち、タイミングが悪くて…。」

父「タイミングじゃなくて、お前の気持ちが弱いんじゃないのか。」
拓也「…。」
父「悪いと思ったらちゃんと心から謝る。
それが礼儀だ。挨拶だっておはようだけじゃない。
こんにちは。ありがとう。すみません。お疲れ様。失礼します。
失礼しました。さようなら。父さんは毎日何十遍も言ってる。
会社の連中もだ。いや、言葉は違っていても

世界中の人達が挨拶を交わしている。それが世界共通の
マナーだし、何よりも人と人とのコミ三ケーションの
基本だ。わかるだろう、そんなことくらい。」

拓也「…まあ。」
父「ちゃんとやってみろ。何て事ない。
案ずるより生むが易しだ。

母が台所から。
母「あら、拓也は難産だったのよお～」
父「そういう事じゃないだろう…。まったく（失笑）…。」
愛想笑いの拓也。

翌日。
いつもの教室に向かう廊下。
階段のエントランスでカーズを待つ拓也。
目の前を通り過ぎるカーズ。
深呼吸をして飛び出る拓也が意を決して。
拓也「ミスターカーズ。グッドモーニング。」

その声で振り返るカーズ。
一瞬驚いた顔で固まる。
やがてゆっくりと表情がほどけて
カーズ「ハ～イ、グッドモーニング。タクヤ。」
拓也「…あれ。俺の名前。覚えててくれたんだ。（嬉しそう）」

カーズ「モチロン。ア～。ソデフレアウ仲モ何カノ縁デスネ。
チヨット痛イフレアイダツタケドネ。」

頭をポリポリかいて恥ずかし気に言う。
拓也「てっきり嫌われてるかと思った。」
カーズ「ノー。ノー。（英語で話し始める）」

NA「いや～。良かったですね。挨拶は社会人としての、いや人間としての基本です。
あなたの挨拶が皆を明るく元気にさせる
力を持っているのです。さあ、今日から挨拶を！」

カーズの話しが続いている。
拓也がケータイで時間を見る。
拓也「あつ。時間！」
カーズ「ウワ～オ！！」

きびすを返す二人がストップモーション。

エピソード４　「スノーボード」（待ち合わせ）

バス停前に停車していたバスが出発する。
ポツリとバス停前に立つスノーボードを
待った美紀が残される。

美紀「…。」
待合所に向かつて歩き出す。
拓也「美紀～！」
振り返ると走って来る拓也。
拓也「いや～。悪い、悪い。」
美紀「何時だと思ってるの！」
拓也「悪い、ホントにごめん。実はさ、昨日先輩
に捕まっちゃってさ。飲みに連れて行かれちゃって。
明日早いからつて断ったんだけど、全然聞いてくれ
なくって、結局三暗まで付き合わされて…。」

しゃべり続ける拓也。憮然とした美紀の顔。

NA「おやおや。いきなり言い訳ですか？それも、
あたかも無理に誘った先輩が悪いというように
とれてしまいますよ。
美紀さんは散々、待たされたあげくに
『遅刻しても仕方ないでしょう。』と言われていると感じて
てしまうかも知れません。
待たされて感情的になっている分、マイナスの
フィルターを通してしまうのです。
だから『言い訳じゃない』としても
『言い訳』に聞こえてしまうのです。
理由は相手に聞かれてから言いましょう。
例えばこんな風に。」

画面が巻き戻る。（早回し）
拓也「美紀～！」
振り返ると走って来る拓也。
拓也「いや～、悪い悪い。」

美紀「何時だと思ってるの！」
拓也「悪いホントにごめん。せっかくのスノーボードだった
のに。本当にごめん。」
頭を下げる拓也。

美紀「何で遅刻したの。」
拓也「何言っても言い訳になるからさ。とにかく俺が悪いんだ。」
美紀「いいから、ちゃんと説明して。」
拓也「うん。実はね…。昨日研究室の帰りに
部活の橋本部長に捕まって、飲みに連れ
ていかれちゃってさ。もっとちゃんと断れば
良かったんだけど、なんだか断りきれなくて…。
気がついたら三時過ぎてて。朝目覚まし鳴っ
てんのに起きれなくてさ。悪い。本当に悪かった。
ごめん。（頭を下げる）」

美紀「そうかぁ。部活の先輩に誘われたら私だって
断りきれないもんなぁ。
ごめん。…私の方こそ何も聞かずにキツく言って。」
拓也「仕方ないさ。俺が遅刻したんだから。」
美紀「いいって次のバスすぐ来るし…。」
　　二人の会話は続く。

NA「と、こんな感じ。
　　謝る時は潔く誠心誠意きちんと相手の目を見て
　　お詫びの気持ちを伝える事。
　　コミュニケーションはいつもFOR　YOUのスタンス
　　が大事です。」

エピソード５　「バイト　喫茶店」（アルバイト）

　開店前の店。
　ガラガラと扉が開くと準備中の店主がいる。
店主「おはよう。」
拓也「おはようございます。」
店主「あれっ。明日は大事な試験があるから休むって言ってなかったか。」
拓也「電話来て今日山田が代わってくれっていうから。」
店主「あ～。風邪気味って言ってたな。」

店の奥に行く拓也。
店主「他の誰かに頼めばよかったのに。」
拓也「…。」
店主「明日大丈夫か？ 勉強したほうがいいんじゃないのか？」
拓也「…まあ。」
店主「バイトだからな。うちは。」

エプロンをつけながら店に出てくる拓也。
店主「木村君、もうテスト終わったって言ってなかったか」
拓也「ああ…。」
店主「替わってもらったら。」
拓也「いや、いいっすよ。俺バイト代稼ぎたいし。」
店主「ダメだって。うちに来てて成績落ちたら親御さんに合わせる顔がないべ。」
無言の拓也。

店主「最近はバイト休まないけど学校休んだり遅刻する奴が
　　増えてるって聞いてるけど。そうなのか」
拓也「俺ですか？」
店主「おう。」
拓也「どうかな…。（曖昧な返事）」
店主「違うって言わないってことは当たってんだ。」
拓也「…。」
店主「バイトは社会人になる前の社会勉強になるけど、あんたらはまだ学生だ。
　　勉強するために学校にはいったんだろ。今勉強しないでいつやるんだ。」
拓也「…。」

再び元の服に着替えた拓也が店を出ようとしている。
拓也「じゃあ、帰ります。木村君すぐに来るっていってましたから。」
店主の声「あつ、ちょっと待って。」
厨房から出てくる店主
袋を渡す
店主 「これ食べて試験頑張って！」
　焼き鳥の詰め合わせだ
拓也「ありがとうございます」
店主「いい報告待ってるからな」
拓也「はい」
店から出ようとする拓也
拓也「のれん出していきますね」
店主「おう。よろしく。」
NA「主たる仕事の他にする仕事、副業がアルバイト。学生の本文を忘れずに」

エピソード６　「一番前列に座る」（CHANGE）

大学授業。
　教室の一番前列に座りペンを走らせる拓也。
真剣な表情。
教授の毛が聞こえている。

〈回想〉
教室に遅刻して入ってくる拓也。
その耳にイヤホンが…。
無言のままガタガタと音を立てて座る。
迷惑そうなクラスメイト。
教授の不快な顔。
何も気にせずレジ袋からマンガを出しパラパラと
見始める。
不快な顔のクラスメイト達。
教授「（嘆息をつく）。」

机にうつぶして寝ている拓也。
肩をたたく教授。
目を覚ます寝ぼけ顔の拓也。
すでに教室には誰もいない。

教授「一体学校に何しに来てるんだ。寝るためか。」
拓也「…バイト忙しくて。」
教授「理由にならないな。そういうのを本末転倒というんだ。
　大学は勉強する所で寝る所じゃない。」

拓也「ハァ…。」
教授「将来困るのは自分なんだぞ。」
拓也「ハァ…。」
教授「黙って座ってても単位はやれないからな。」
拓也「どうしたらいいんですか？」
教授「そんな事くらい自分で考えろ。大学生なんだぞ。」
拓也「わからないから聞いてるんですけど…。」

教授のあきれた顔。

拓也のポケットでケータイが鳴る。
取り出そうとする拓也の腕を押さえる。
拓也「！？」
教授「一つだけ約束をしろ。そしたら単位をやる。」
拓也「なんですか、それ。」
教授「今後、私の講義は必ずあそこに座る事。」

最前列の席を指さす。
明らかに不快な表情の拓也。
教授「遅刻をしない事。」
拓也「…ふたつじゃん。」
教授「約束できるか。」

ケータイが鳴り続けている。
拓也「（迷って）手、離してくれたら。」

前列で講義を受けている拓也。

（拓也のモノローグ ）
「半年前。仕方なくこの席に座った。
居眠りもケータイもできないし、
もちろんマンガも読めない。
ボンヤリと講義を聞いているうちにつまらないと思っていた
講義内容がだんだんと分かるようになって来て、
そしたら面白くなって、気がついたら遅刻もしなくなっていた。
だから今は自信を持って言える。
俺は大学に勉強する為に来ているんだって。」

教授の声「はい。ここまでで何か質問は。」

「はい。」と手を挙げる拓也。

エピソード７　「カーズ車イス」（お別れ）

☆カーズ・サワムラのシーンは全て英語と日本語のミックスで考えています。
　車イス用の昇降機が昇る。
廊下をゆっくりと進む車イス。
学生達が好奇な目で通り過ぎていく。

ドアが開き教室に入る車イス。
教室の学生達が一斉に見る。
ゆっくりと進む車イス。
車イスを押して来た人物がフレームアウト。

カーズ「グッドモーニング。」
学生「グッドモーニング。（小声）」
カーズ 「（首を振る）グッドモーニング！（元気よく）」
学生 「グッドモーニング！！」
カーズ 「GOOD！！」
回りこむカメラが「カーズ」を捉える。

頭に包帯。
サングラスのカーズ。

カーズ 「今日ハオ別レヲイイニキマシタ。
ワタシノ不注意デミナサン二心配ヲカケテシマイ本当ニスミマセン。
タクサンのオミマイアリガトウ。タクサンノメールヤ励マシノ言葉アリガ
トウ。感謝ノ気持チハ言葉ダケデハイエマセン。ホントウニアリガトウ･･･。」

学生達は無言で聞いている。

カーズ 「残念ナガラモウ君タチノ顔ヲミルコトハデキナイヨウデスガ、
ワタシノココロニシツカリト焼キッイティマス。ケツシテ忘レマセン･･･。
ワタシノ気持チハ、イツモアナタタチト共二イマス。
ダカラ、サヨウナラハイイマセン･･･。
ココデキミタチトスゴシタ時間ハワタシノ宝物ノデス。アリガトウ･･･。」

何か言おうとするが言葉がみつからない学生達。

思わず立ち上がる拓也。
拓也を見つめる仲間。
次第に熱いものが込み上げる拓也。
…柏手する。
それにつられて一人、二人と柏手の数が増えてくる。
やがて教全員が立ち上がり柏手をしている。

徐々に大きくなる柏手。

頷きながら柏手を受けているカーズ。
サングラスの奥から涙が溢れ出る。

教室の外。
教室の中から柏手の音がこぼれやさしさに包まれている。
ゆつくりと白地へと。

エピソード８　「社会人 EV 前」（フライング）

会社 EV 前。
拓也が EV を待っている。
ドアが開き杉山が出て来る。
拓也「あ。おはようございます。先輩。
例の北海工業の件、朝一で発注かけておきました。
杉山「北海工業って交渉が難航してた奴じゃなかった？」
拓也「はい。北海工業の希望額に譲歩する変わりに
　納品の数を倍にしてもらう様、交渉しました。」

杉山「けっこうやるじゃない。で、課長の OK はもらった？」
拓也「それは、これからです。」
杉山「えつ、課長の OK ももらわずに一人で進めたの。」
拓也「はい。しつかり考えてやりました。」
杉山「井上君…。」

拓也「どうかしましたか。」
杉山「何、勝手にやってんの。」
拓也「だって先輩がいつも言ってくれてるじゃないですか。
自分で考えて自主的に行動しろって。」
杉山「それとこれとは違うでしょ。」
拓也「何が違うんですか。」
杉山「いい？。君のアイディアと実行力は認めるけど、
　　誰にも相談せずに勝手に進めた事が問題だと言ってるの。」
拓也「じゃあ、どうしたらよかったんですか。」
杉山「仕事はね。チームプレイなの。
　　サッカーと同じ。フォワードもディフェンスも
　　両方いなくちや勝てないでしょ。」

拓也「はあ…。」
杉山「とにかく急いで課長に報告しましょ。」
拓也「すみませんでした。勝手に動いてしまって。
　　軽卒でした。」
杉山「…。いい？失敗は無駄にならない。ただし、同じ失敗を
　　繰り返すのは無駄。おまけに進歩がないということよ。

よ.く、覚えておいて。」

拓也「はい。忘れません。すみませんでした。」
杉山「大丈夫。（微笑）皆で一番良い対応を考えましょう。これはあなた一人の
問題じゃない。会社の問題なんだから。」

拓也「はい。」
廊下を歩く二人。
NA「おやおや、新人社員の拓也君。かなりのフライングを
してしまったようですね。社会人は自主性を持っているのは
当たり前の事ですが、もう一つ協調性がなければ、
良いチームプレイは出来ませんよ。それと、同じ失敗は
繰り返さないようにね。」

拓也は後ろを振り返り「わかった」というように手を挙げる。

エピソード９　「会議　担当替」（引き継ぎ）

会議室。
課長の前に拓也と井上が並んで座っている。
課長「杉山の担当だったアドワンコーポレーション。来月から
　　井上が担当してくれ。」
拓也「えつ、あつ、はい。」
課長「杉山、引き継ぎ頼んだぞ。」
杉山「わかりました。」

休憩室でコーヒー。
拓也「あ～つ。」
杉山「話は聞いてるわね。アドワンのダニエルマネージャーの話。

拓也「三時間も説教したっていう話ですよね。」
杉山「私の前の担当だった小玉さんの納品ミスでね。」
拓也「どうなんです。怖い人なんでしょ。」
杉山「そう思う。」
拓也「だって、三時間説教って半端じゃないですよ。俺、自信ないなー)。」

NA「心配そうですね。まっ、意外といつも以上に
　　慎重な言動でうまく人間関係を作れるかもしれませんよ。
　　その為には予めいろいろと情報を集め、客観的に分析する事が大事です。」

拓也「誰に聞いてもあまり知らないって言うんですよ。」
杉山「そりやそうよ、二年前できたばかりのインドとの
　　合併企業だから。」
拓也「いやだな～、よりによって何で俺が…。」

NA「ここで一つ客観的に見るコツを教えましょう。
　　それは情報を断片化する事です。」

テロップ
①『ダニエルマネージャーは説教を三時間もした、だから怖い人。』
②『ダニエルマネージャーは説教を三時間もした。』
③『怖い人。』

NA「②と③の間の理屈は成り立ちません。つまり、何か別な
理由があるのかもしれません。ほら、そう考えるだけで
安心できるでしょう。」

拓也「最初に担当した小玉さん、嫌われてたんですかね。」
杉山「逆よ。すごく信頼してもらってた。」
拓也「え？」
杉山「だから二度と同じミスをしない様にとわざわざ食事に誘ってくれて
三時間も説教をしてくれたってわけ。」
拓也「そうなんですか。」
杉山「間違った先入観を持ってしまうと真実が見えなくなってしまう。
注意しなくちゃ。」
拓也「はい、良かった～。優しい人で。」
杉山「誰が優しいって言った？」
拓也「え？」
杉山「挨拶にも厳しいし時間にも厳しい。
納入価格には特に厳しい人よ。」

拓也「フ～。ちゃんと勤まるかなぁ～。」

NA「先に何かあるのかが分からないから怖い。
だから、怖さを克服するためには先に進むしかないのです。
少しだけ勇気を持って…。」

杉山は席を立ちながら
杉山「言っておくけど、英語しかしゃべられないからね。」
拓也「えっ。」
一人残る拓也の表情。

エピソード１０　「面接」

　『面接 A パターン』
自動ドアから飛び込んでくる拓也。
会談を駆け上がっていく。
ドアに貼ってある面接会場の文字。

ドアを開き入る拓也。（緊張の表情）
中には面接官が 4 人並んでいる。
拓也「（ペコリと頭を下げ）どうも…。（消えそうな声）」
　緊張の限界

つかつかとイスに座る。
拓也「あっ。」
飛び跳ねる様にイスから立ち上がる。
拓也の額。汗が吹き出る。

面接官 1 の声
「どうぞ座ってください。」
拓也 「どうも。（消えそうな声）」
面接官が一斉に書類に目を落としてチェックする。

〈SE〉時計の針が刻む音。
拓也の表情。

面接官 1 の声
「あなたが大学で学んだことを一つだけ挙げて簡単に
　説明してください。」
拓也「学んだこと…。えっと…。ひとつだけ…。（目を伏せる）」

面接官 「なんでもいいですよ。」
拓也 「え～と…。急に言われても…。（泳ぐ目）」
面接官 2「授業には出席していたんですよね。」
拓也「…はあ。出席は…。ただ…。」
面接官 2「ただ？」
拓也 「あ、いえ…。あんまりちゃんと勉強。（なんとなく笑う）」

額から汗が流れ落ちる。

面接官３「最後にあなたのセールスポイントは何ですか？」
拓也　「あ～。セールスポイント、ねえ…。」
一斉にチェックをする面接官。
〈SE〉徐々に大きくなると系の音

C・O

『面接 B パターン』
ドアを聞き入る拓也。
中には面接官が４人並んでいる。

拓也　「失礼します。（面接官を見て）よろしくお願いします。」
面接官１の声
「どうぞ座ってください。」
拓也「はい。失礼します。」
イスに座る。
面接官が書類に目を通す。

面接官を正視している拓也。
面接官の声
「あなたが大学時代で学んだことを一つだけ挙げて
　簡単に説明してください。」
拓也「はい。私は在学中に多くの事を学びましたがその中で
　　最も大切なこととして心に刻んだのは技術の進歩に近道は
　　ないということです。つまり、私の専攻している…（F・O）」

説明を効いている面接官達。

面接官３「あなたのセールスポイントは？」

拓也　「はい。行動力です。考えるだけでは何も結果が出ないので
　　必ず実行に移すのが大事な事だと考えています。
　　フットワークには自信があります。」

面接官３「では自分の弱点は何だと思いますか。」

拓也　「はい。自分の弱点は他人から依頼されると断り切れないという点です。
結果、相手に迷惑をかけてしまうこともあったので、現在はスケジュール表を
つくり、管理をしています。無理な場合は事情を説明して
断るようにしています。」

次々と質問を浴びせる面接官。（イメージ）
〈SE〉時を刻む音。

面接官１「現在の大学生に一番不足している能力はなんだと思いますか。」
面接官２「当社に採用されなかった場合はどうしますか。」
面接官３「エンジニアとしてどのような人生設計をしていますか。」
面接官４「学生と社会人の違いはなんだとおもいますか。」

SE 徐々に大きくなる溶けイオン。（C/O）
しっかり面接官を見据えた拓也の顔。
拓也「はい。私はこう考えます。」

ラスト（エピローグ）

イスの座っている人物。顔は見えない。
イメージ的照明が当たっている。
男「どうでしたか？
　　この世の中、失敗も間違いもしない完璧な人間など存在しません。
　　人は失敗をして成長するのです。つまり、失敗こそ成功の鍵を
　　握っているといっても過言ではありません。
　　恐れず大いに失敗してください。
　　ただし、同じ失敗や間違いを繰り返すのは進歩が無いということです。
　　大切なのは謙虚に反省し自ら変わりたいと思う意思を持つ事。
　　さあ、今から行動に移しましょう。それが社会人への第一歩なのです。
　（立ち上がり去ろうとする）あ～。そうそうこの映像の中に人を
　　ハッピーにできる重要なキーワードが隠されていました。
　　おわかりになりましたか？（男は去っていく。）」

一脚のイスが空間に残る。

〈テロップ〉
構成・制作　風の色
企画・監修　国立大学法人 室蘭工業大学